
世界は秘密にあふれてる

岩戸 勇太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界は秘密にあふれてる

【Nコード】

N8224R

【作者名】

岩戸 勇太

【あらすじ】

主人公は、夜は正義のヒーローとして戦っている。

こんな馬鹿げた秘密を持っている人間は自分くらいであろうと、本人は思っていた。

だが、世界にはそれ以上の秘密であふれていたのだ。

一部

第一豊崎中学校の三年生である雪花沙之^{せつか さゆき}は間違いなく学校のアイドルである。

今年の生徒会長も勤める、絵に描いたような優等生である彼女は、この俺、岩城雄吾^{いわしろ ゆづこ}の幼馴染である。

他の生徒達にとっては、高嶺の花である彼女に気安く近づくのは俺くらいだ。周囲から、嫉妬や恨みのこもった視線を向けられる事も多いが、それも、もう慣れたものである。

今日も、他の生徒も多い昼休みの廊下で、彼女の姿を見かけて俺は声をかけた。

「よう。ちょんまげ」

それを聞くと、沙之はギロツと俺の事をにらみつけた。そして、俺に近づいてきて顔を俺の目と鼻の先に近づけてきた。

ここで、周りの視線が痛くなってくる。ここまで顔を近づけて何を話しているのか、周りの奴らは気になるところだろう。

だが、実際にする話はそんなにいいものでもない。小さな声で言ってくる。

「学校で私の事をそう呼ぶな！」

「隠すことないだろう？ みんなに言ってみたらどうだ？ 意外とウケルかも」

「言ったらクロス……」

品方向性で、周りからの信頼も厚く、成績も優秀な生徒会長として周りには通っている沙之は、普段の彼女からは到底想像できないようなドスのきいた声で言ってきた。

だが、何を言ったところで、俺には効かない。夜の俺は、こいつよりも何倍も怖い奴らと戦っているのだ。このくらいでは何も感じはしない。

何を言っても無駄だと感じたのか？ 沙之は、ウエーブのかかつ

た、軽く染めた髪を揺らして振り返ると、俺の前から去っていった。
しまった。

「沙之さん。何を話したんですか？」

近くにいた女生徒が沙之にそう聞いてきた。

「なんでもないのよ……」

言葉を濁して話をうやむやにした沙之は、その女生徒と一緒に
って歩いて、自分の教室に戻っていった。

ここは閑静な住宅街である。そこに、隣り同士で立つ、普通の家
が俺の家と沙之の家だ。

この辺りは建て売りの物件であつた、似たような外観に、似たよ
うな構造の家が並んでいる住宅街である。

俺は、お袋に言われてすぐ隣にある沙之の家にまで向かつた。

作りすぎたおでんのおすそ分けというのが、その理由だ。

俺がこんな雑用を喜んで引き受けたのも、実は沙之の事をからか
うためである。

「沙之さん。今日もちよんまげしていますかー？」

わざと、何回もしつこく家のチャイムを鳴らすと、明らかに苛立
っていると分かる足音が二階の部屋から降りてきた。

「ちよんまげ、ちよんまげ、うるさい！ 面白いことを言っている
つもりなの？」

「俺はすんげえ面白いと思っているぞ」

家のドアを開けたのは沙之であつた。挨拶代わりに軽く会話をす
る俺と沙之。

学校での彼女は、きちんと整えられた、シワ一つない制服を着て、
背筋を伸ばして歩く姿だつた。

だが、今の沙之は、ダルダルの上下ジャージ、前髪が目にかから
ないように髪を結んで立てている。それに、この方が目が疲れない
と言つて、ビン底のような分厚いレンズの眼鏡を使つており、それ
らを総合して見ると、かなり野暮ったいモテなそうな女子にしか見

えなかった。

沙之は、俺がおでんを渡すと、素直に受け取った。

「少し上がっていく？ いいお菓子もあるし」

俺がこちらの家に来ると、いつもこいつは自分の部屋に、俺をあげようとする。

こいつの家にはいつも上等な菓子がある。それにつられて、俺もホイホイとあがってしまうのだ。

俺は、沙之の部屋にあがると、タンスの隙間に手を入れた。すると、中にはカビの生えたポテトチップスが入っていたのだ。

うんざりした俺は、菓子の袋や、何かの包装紙で、てんこ盛りになったごみ箱の上に優しくポテトチップスを置いた。

だが、もうすでに微妙なバランスでごみ箱に収納をされているごみ達の上に、ポテトチップス一つが置かれるだけの余裕は残されていないらしい。

ポテトチップスは、はらりと落ちていく。

「この家、燃えるゴミの袋はどこに置いてあるんだ？」

そう俺が聞くと、沙之はいつも通りに怒って返す。

「毎度、毎度！ 何で私の部屋に来ると掃除をしようとし始めるのよ！」

「周りを見てわからんか？」

これが沙之の秘密である。彼女は片付けられない女なのだ。

しっかりとハンガーにかけられているのは、学校の制服くらいのもの。アイロン台が隅に置かれているが、それをどこに置いてアイロンがけをしているのか、問いただしたくなるくらいに、沙之の部屋には物があふれている。

俺は床に落ちている服を拾い上げて言う。

「おい……この服には何かのシミが付いているが？」

「知ってるわよ。この前ケチャップをこぼしたの。もう着ないし、そのままにしておいて」

「何かが違わないか……？」

捨てるなり、染み抜きをしまっておくなり、するもんなんじゃないだろうか？

俺はそう疑問に思うが、沙之には、『何かが違う』などと言っただけではそこまで伝わらないようである。俺の言葉の意味がまったく分かっていないのが感じられる、キョトンとした顔をした。

沙之が一階に降り、俺はこの部屋を掃除したくなるのを我慢しながら部屋で待った。

見渡す限りぐちゃぐちゃの部屋。タンスの上まで雑多に物が置かれており、今にも崩れてきそうな状態だ。

この中で、一つだけ何も置かれていない戸棚がある。そこには一つの写真が飾ってあった。

そこに写っているのは、明朗闊達なのが分かる、とても楽しげな笑顔をした子供の写真だ。男の子と女の子が二人でじゃれあいながら写っている。

何を隠そう、これは十年前の俺と沙之の写真である。沙之はこの部屋の中で、唯一その写真の周りには何も置かずにいる。

埃一つ無い様子を見ると、そこだけは何度も掃除をしているようである。

「恥ずかしい……」

過去の、ガキだった頃の自分の姿を見せられると、むしように恥ずかしくなってくる。何も知らず、毎日楽しいことばかりで、不安なんて何も無かった。

沙之と一緒に遊べれば、他に何もいらなかった頃の自分は、俺から見ても輝かしい。いまではこんなすれた中学生になってしまったのだ。

一階から階段が上がってくる音が聞こえてきた。沙之がやってきたのだ。一人で勝手にアンニユイになっているなんて知られたら、沙之に笑われてしまうだろう。

俺は、いつもの調子で沙之を迎えた。

「今日の菓子は何だ？」

沙之の親戚が和菓子屋をやっているという話で、沙之の家の和菓子は特別に美味い。

さらに、沙之自身がお茶の淹れ方だって学んでいるようで、ちょうどいい温度の緑茶を淹れてくるのが、また和菓子を美味しくする。

「あんたは本当に色気より食い気ね」

「お前に色があると思ってるのか？ 食い気に走るのも当然だ」

「そうなの……」

自分としては憎まれ口に、憎まれ口で返しただけのつもりだった。なんか、地味にリアルな反応が返ってきた。

沙之は、いきなり声を小さくして下を向いたのだ。

「ちよつと待て。なんだそのリアルな反応は……」

「なんでもないわよ。お茶が冷めないうちにどうぞ」

険のこもった言い方をされる俺。

気まずい……

さっきの言葉の何がいけなかった……

俺にはどうにもわからなかった。気まずくて、何もいえない俺。

とりあえず、出された羊羹を口に放り込むが、どうにも美味いとは感じない。こんな不味い菓子を食ったのは初めてだ。

羊羹を食う俺に、沙之は言う。

「ねえ、昔は良かったね」

そして、沙之はあの写真を見つめた。

「昔か……」

確かに小さな頃は楽しかった。今みたいな憎まれ口の応酬なんかはない。沙之とただの友達でいれたのも大きかった。

今では、みんなから慕われる生徒会長と、無愛想なひねくれ者という、水と油のような人間同士になってしまった。

ただ、思う。

「子供の頃は楽しかったさ。だけど、今は今の楽しみ方があるんじゃないか？」

子供には、何もかもが新しくて、驚きの連続だった。この年にもなって、新しい発見なんてそうそうあるもんじゃない。

それなりの経験を持ち、それなりに知っている事もある、今の楽しみ方というものもあるのではないか？

「例えば、何があるの？」

沙之は、俺の目をじつ……と見つめながら言ってきた。

また、こいつは何のつもりだろうか？

いつもとは違う沙之の態度に、俺は気まづくなる。

「部活だってあるし、お前だったら顔も広いから友達ともっと遊んだりしたらいいんじゃないか？」

「他には？」

「……何があるかな……？」

自分では、何があるのかまったく気づかない。何かを言わせようとしているのは分かっているが、何を言わせたいのか分からない。

「もういいわよ……」

何か不満そうにしてそういう沙之。

沙之の様子は変だが。俺は、この気まづい空気から開放されてほっとした。

夜になると、俺の右腕に埋め込まれた宝石が熱くなりだす。

部屋のテレビでサッカー中継を見ていた俺は、苛立ちながらも腰を上げた。

勝負は終盤。俺ひいきのチームが0 - 1で負けており、残り時間が一分で、最後のチャンスのフリーキックを決めようという時の事だ。

「いいところだったのに……」

不満が俺の口から漏れる。だが、それよりも重大な事態が夜の町で起こっているのだ。

骸骨が何体も町を歩いている。

そう呼ばれるウイルスが研究所から漏れ出し、人間や動物を凶暴化させ、町で暴れているというのだ。

それは、ゲームや映画に出てくるウイルスのように、人をゾンビ化させて人を食って数を増やすように仕組まれている。

その数が増えないように見つけ次第殲滅するのが俺に課せられた役目である。

「ウォーリア。A—12。変身」

声紋認識で起動する、バツクルの形をした装置に声をかけると、体がスーツに覆われていく。

右手から順番に、まるで水が体の表面を浸透していくかのようにしてスーツは体全体に広がり、やがて、全身に装着をされた。

頭に被ったヘルメットの中では、研究所の偉いさんの声が聞こえてくる。

「今回も任務に従事をしてくれて感謝をする」

「感謝の言葉はいいが、後任をそっちで探すって話はどうなったんだ？　いつまでも『孤独なヒーロー』なんて、こっちもやってられないぜ」

「現在捜査中だ。なにぶん、素質を持つ人間というのはそう多くない。簡単に見つけられるものじゃないんだよ。君の事を見つけるのにも、どれだけ苦労をしたことが……」

偉いさんの言葉に、俺は思わず舌打ちをする。

本当ならば、こんな事は俺だってやりたくない。金はいくらか送られているようだが、痛いし、キツイし、そのうえ命の危険まである。どう考えても割に合う仕事ではない。

俺は、手早く仕事を終わらせるべく、骸骨の方へと向かって走った。

二部

次の日の昼休み、俺は生徒会室に向かった。

生徒会長である沙之の部屋なんだから、この部屋は俺の部屋も同然。

勝手な事を考えているのは分かってはいるが、他に誰かがいるわけでもない。ここで昼寝をしても誰の迷惑にもならないのだ。昨日は骸骨退治の仕事をしてほとんど寝ていない。静かに時間をすごすにはちょうどいい場所である。

生徒会室の力ギは壊れている。それをそのまま、放置しているとこのを知っている俺は、生徒会室のドアをあけた。

そこには二人の人影があった。

「取り込み中だったか？」

見知った顔であつたため、俺は声をかける。

一人は、長身で引き締まった体をした奴だ。

鋭い眼鏡をかけている風貌を見るに、隙の無い感じがする。

そいつは、この生徒会の副会長の道山千晴みちやま ちはるである。

「今終わったところだ。気にする事はない」

道山が言う。

もう一人は、身長は道山と比べてやや低いくらいの背の女だ。道山と比べて少し小さいという事は、女にしてはかなりの長身であるという事である。

頬に手を当てて、おっとりとした調子をとる様は、豊満な体つきの彼女の容姿そのもののような印象を受ける。

本人自身も、のんびりした奴だ。

この生徒会の会計の、笹波陽子ささなみ ようこであつた。

「岩城君、いけないんだ」。また生徒会室で昼寝をしに来たのですか？」

のんびりした口調だ。しゃべり方としぐさを見るだけでも眠気を

誘われてしまう。

俺は言う。

「ラリホーを唱えながら言われても説得力が無いですよ」

それを聞いて、きよんとした笹波は、また眠気を誘う、のんびりした声で言う。

「ラリホーってどういう意味なんですか？」

そこに道山が言う。

「笹波。お前はもっとハキハキと物をしゃべったほうがいい」

道山がそう言うと、笹波は子供のように顔をふくらませて答えた。それから道山は、笹波の手を引いて、生徒会室から出て行った。

これで邪魔者はいなくなった。俺はいつも寝ているソファに寝転んで、眠りについた。

俺は携帯の時間を確認した。

アラームが鳴るまであと五分あるのを確認すると、また俺は目を閉じる。

少しすると、足音が聞こえてくる。目を閉じている俺は誰かをいちいち確認しなかった。

どうせ、道山か笹波が戻ってきたのだろう。

その後、俺の額に固いものが叩きつけられる。

「いつてえ……」

頭を上げると、そこには沙之がいた。

「あんた、また笹波さんに何か言っただんじょう？」

どうやら沙之は、本の角で俺の事を殴ったらしい。額を押さえて起き上がる俺に、沙之は続けて言う。

「『ねえねえ。雪花さん。今度会ったら岩城君のことをぶっちゃって』なんて言ってたわ」

「すんげえ似てる……」

あのおっとりとした口調を真似た沙之。魂がこもっている演技のようであった。

「あんだ、目を離すとすぐこれなんだから……」

呆れた様子で言ってきた沙之。

「悪かったよ……」

俺のすぐ隣に立った沙之は、なぜか優しい視線を俺に向けてきた。

俺は、また夜に呼び出しをされた。

今は家の前にいる。閑静な住宅街で、月の光も弱く、周りが暗い。指示された通り、すぐに変身をして偉いさんの言葉を聴いた。

「また任務を頼んでしまつてすまない。今日はウイルスの感染元が見つかったのだ」

ヘルメットの中に聞こえる偉いさんの声。

普段は感情の見えない声であるが、今は声の中に喜しそうなものを感じる。

感染元が見つかったとなれば、それを何とかしてしまえば、俺だつてこのふざけた役目を終える事もできるのだ。俺は偉いさんの声を真剣になつて聞いた。

「この町の近くにある山の中だ。そこからウイルスが異常発生しているのが分かった。すぐに調査に赴いてくれ」

視界の端に地図が出される。俺は屋根の上を飛び移りながらその山まで向かつていった。

周囲は木に囲まれており、山の一部を切り出してスペースを作つただけの傾斜になつてゐる場所である。

大きな黒鉄で作られた棺のようなものの前で、巫女衣装を着た少女がたたずんでいた。

「困りましたねー。どうしましょうか……」

彼女はそう言うが、のんびりとした口調であつた。別に困つてゐるようにも見えない様子だ。

その少女。笹波陽子は、鉄でできた黒い棺を見た。黒い棺には、いくつかの札が貼られ、しめ縄が締められ、周りにも結界を張つて

いるのが見て分かる様子で、縄が張られている。

明らかに何かを封印しているのが分かる見た目である。

「道山君が間に合ってくればいいですけど……」

のんびりした様子でそれ見ている笹波は、そこにたたずんでいた。周りの木の間から、人影が現れた。笹波はそれを見てのんきな声を出す。

「あら？ 知ってるわよ。それはコスプレっていうのですよね」

その戦闘スーツを着た人影を見て、陽子はのんきな口さで言った。

「会うなりいきなりコスプレとか言われたぞ。だからこんな事をやるのは嫌だったんだ」

ヘルメットの中で、俺はそう愚痴った。偉いさんに、その声は聞こえているはずであるが、俺の愚痴を聞いても偉いさんは何も答えなかった。

「あら？ どこかで聞いたことのある気のする声ですね」

普段トロトロしているくせに、こういう時だけは鋭い……

この緊急時である、あの棺の事も聞かねばならない。ならば顔見知りであると教える方が都合がいいだろう。俺はヘルメットを外した。

「岩城君……君ってコスプレをする趣味があつたんですか？」

「説明をしたら伝わるかな……」

いつもの様子で言う笹波。難しい事を言ったら理解をできるだろうか？ と不安になったが、俺は説明をした。

人や動物を凶暴化させるウイルスが今この町にはびこっている事。このスーツは、その凶暴化をした奴らと戦うために着ている事。

今、ウイルスの発生源の調査をしている事。そして、その発生源にやってきたら笹波がいた事。

「まあ……『けがれ』が外に漏れてしまっているのは知っていたけど、そんな事になっているなんて知らなかったです」

「『けがれ』っていうのは何だ？」

「この棺には昔大暴れした『大魔王』が封印されています。『大魔王』はこの封印の中で封印を解こうとしてこの棺の中で暴れている状態です。この封印はすぐにでも破られそうな状態なんです。だから、中に充満している『けがれ』を少しずつ漏らして風船のガス抜きのようにしてパンクをするのを抑えていたのですけど……」

笹波が言うには、その場しのぎもそろそろ限界らしい。

そして、その『けがれ』には、動物を凶暴化させたり、死体を動かして人を襲わせたりする力が備わっているというのだ。

偉いさんは、俺にはウイルスだとか言っていたが、こここのところの騒ぎの原因はそれだったのである。

「なるほど。だからいくら調査してもウイルスの素体が発見されなかったのか」

白々しく偉いさんは言う。偉いさんは俺にウイルスなんて、もつともらしい嘘を教えていた。

「何で、俺には研究所から漏れ出したウイルスなんて事を言った？」

「人にものを説明するのは難しいのだよ。」

謎の動物や人間の凶暴化。原因不明で正体不明。そんな説明をしたら、怖がって任務についてくれないかもしれないじゃないか。

ある程度、相手の正体が分かっているように説明をした方が安心できるものだろう？」

まあ、確かに……

ただでさえ嫌な仕事なのに、敵の事が何も分かっていないなんて言われたら、俺だって不安にもなっただろう。

納得したくないが、偉いさんの言う事はもつともだ。

だが、俺はこの事態を完全に受け入れたわけじゃない。笹波に聞いた。

「お前……それって本当なのか？ お前の妄想じゃなくてか？」

「あら？ あなたこそ、『孤独なヒーロー』なんてやっておいて、私の事をそんな風に言えるんですか？」

顔をふくらませて言う笹波。確かに自分の状態だって、人に言ったら同じことを言われるだろう。

大魔王を封印し続けている一族の笹波。夜は孤独はヒーローとして戦う岩城。つまり俺。

二人は、重大な秘密を共有してしまったのだ。

「あと、道山君がすぐこっちに来ますよ。道山君の作った『魔王を殺せる剣』が届いてくれば、魔王を再封印する事もできると思いますから」

副会長も何かがあるらしい……

自分の周りは、自分も含めて正義のヒーロー達であふれているのだ。俺は、世界のとんでもないヒミツに触れてしまった。

知りたくなかったこんなヒミツ。

とにかく、今はなにもする事がない。副会長がやってくるまで待つことにしよう。

副会長は、それから数分とせずに来てきた。

戦隊物のような戦闘スーツを着ている俺が言える事ではない。すぐ前に巫女衣装を着た笹波もいる。

だが、どうしても言うのがガマンでできなかった。

「なんだその鎧姿は！」

日本式の鎧を着て現れた副会長の道山は、鬼の面を取り外しながら答える。

「君に言われたくはない」

もつともである。予想通りの返事が返ってきた。

「そんな事は分かってる。言ってみただけだ」

その場に座った俺は、笹波と道山のこれからの行動を見守った。偉いさんの判断によると、この二人が事を収めてくれるというのなら静観をしようという事だ。

俺自身、自分からしゃしゃり出る気もないし、面倒事を代わってやってくれる奴がいるなら、そいつに全てを任せる。俺は、自分で

仕事をこなさねば気がすまないような勤勉な人間じゃない。

道山と笹波は、二人で何やらを話し合って、儀式のようなものを進めるつもりらしい。

「どうすればよかったんだっけ？」

「さあ？ 適当にやってみましょ」

などと、不安になるような言葉も聞こえるが、俺は口を出したりなんかしない。

「この剣、どうもしっくり来ないんですよ。本当に巻物の通りに作ったんですか？」

「半分はカルーアミルクをこぼしてしまつて解読不能になっている。分からない部分は自前だ」

カルーアミルク……今時飲んでる奴なんているのか？ というか、それって酒だろ？ 学生が飲んでいいもんじゃ……いやいや、それ以前に半分が解読不能つてのは大問題じゃないか？

「もお。しつかりしてください」

道山のやる事に、さすがの笹波もあきれているようだ。あの口調のままでもいいから一回道山の奴を叱つてやるといいだろう。

「カルーアミルクは豆乳を使って作るんですよ」

そこじゃない！ 笹波もカルーアミルク飲んでるのか！

「牛乳か豆乳かよりも、ミントの葉を乗せるかどうかの方が重要だろう」

道山！ おまえカルーアミルクにこだわりを持つてるのか！ しかもミントの葉を乗せるとか、乙女っぱいこだわりだな！

「それに笹波こそ、この結界の張り方で大丈夫なのか？ 俺が知っているのと少し違うようだ」

今度は道山の反撃がされた。笹波は、いつものように首をすこし傾けてから答える。

「気付きましたか」。昨日の夜ここで番をしている時、寒かったのでその辺のしめ縄などを焚き火して温まっていたのですよ」

ちよつとまで……つまりこの結界は部品が足りていないって事が

？ 今日になつて『けがれ』が漏れ出したのはそのせいじゃないのか？

「お前……今になつて『けがれ』が漏れ出したのはそれが原因ではないのか？」

道山は、俺の心の声に答えてくれた……そうだ、笹波をいつぺん叱つてやれ。

「大丈夫ですよ。私のお父さんも一緒でしたから。『大丈夫』っていつてましたし」

こいつの親……なんかうさんくさい話だな……親がどんな奴か知らないが……こいつみたいに普段からラリホーを唱えているような奴じゃないのか？

「どういう状況だったんだ？」

道山は俺の心の声に的確に答えてくれる。どういう状況でそう言つたのかは、気になるところだ。

「カルーアミルクをお父さんだけが一人で飲んで温まっていたのですよ。『お父さんだけずるい』って言ったら許してくれたんですよ。」

カルーアミルクがここで再登場した！ 結界を解いたのは、よっぱらいがやった事つて事だろう！ 全然安心できない答えだ！

「カルーアミルクを飲む奴に悪い奴はいない」

それが道山の答えだ。なんていうか……お前の答えはそれでいいのか……

「これで解決だ。今すぐに二人で魔王を消滅させよう」

「そうですね。やっぱ道山君は素敵です」

今のやりとりで、知らない間に二人は友情を確かめ合つたらしい。今から魔王を消滅させるというのなら俺に文句は無い。わけがまつたく分らない茶番を見せられてうんざりしていたのだが、万事解決するのなら黙っていよう。

そう思っていたのだが……ゴウン！ というでかい音が聞こえた。黒い棺が、中から思いつき叩かれたようにひしゃげた。鉄がゆ

がんでコブのような跡が作られる。

ゴウン！　ゴウン！

それが、一つ、二つと増えていく。

「魔王が……復活します……」

笹波が言うのが早いのか、黒鉄でできた蓋が破られる。鉄の破れるデカイ音が辺りに響く。黒い影が上に向けて飛んでいき、目で追うことすらできない速さで、あっという間に夜空に消えていった。

俺はそれを呆然として見つめた。俺の姿を見た道山が、申し訳なさそうにして言い出す。

「すまない。全力を尽くしたのだが、魔王の復活を許してしまった」
「どこがだあ！」

今のほのぼのシーンのどこが全力だったというのだろうか？　俺はたまたらずに大声で叫んだ。

三部

俺は、笹波と道山の二人を落ち着く事のできる場所まで案内した。こうなってしまったからには、二人には事情を聞かなければならないだろう。

さっきから二人が話していた『魔王』というのは一体何か？ 復活してしまった『魔王』に、どう対処をしていくべきなのか？物が乱雑に置かれ、女物の服や菓子の袋でぐちゃぐちゃになった部屋で、座る場所さえない。そのへんにあるものを適当におしわけ、俺達は、ゴミの詰まったテーブルを囲んで話し合っているところだった。

「何で私の家に来るのよ！」
律儀にもお茶を淹れてやってきながら、文句を言った沙之。

沙之の家に訪問をしたとき、最初は道山と笹波のけつたいなかつこうを見た瞬間に、家のドアを閉めようとした。

だが、俺はドアの間に足を挟んでそれを止めた。

俺はぐっ……と沙之に顔を近づけ、できるかぎり神妙な顔をして言う。

「お前にしか頼めないんだ。何も言わずに入れてくれ……」

沙之はビン底メガネにちょんまげ頭の顔を赤くしてから、ドアを開けたのだった。

今の沙之は、髪を整え、メガネをコンタクトに変えて学校の制服を着た姿であった。

「沙之さん。何で家でも制服を着ているんですか？」

笹波は沙之に聞く。

「い……いえ、これは……」

しどろもどろになる沙之。

「お前が何で巫女装束を着ているかの説明の方が先だと思うぞ」

戦闘スーツを着ている俺に言えたことではない。だが、笹波にだって言えた事ではないはずだ。

「まあ僕から話そう。僕は聖剣の製法を受け継ぐ一族だ」

道山が言うのに笹波が続く。

「私は魔王を封印する一族の末裔です」

次は俺だろう……言いたくはないが言うしかない。

「俺は孤独なヒーローだ」

聞いた沙之はキョトンをしていた。それはそうだろう。俺だってまったく意味が分からないのだから。

そこにすかさず笹波が言った。

「そして、沙之さんは片付けられない女ですよ」

「あんたらと一緒にするな！」

そして、道山がすかさず言う。

「君の秘密の重大さも理解している。打ち明けてくれてありがとう」
「あんたらに比べては全然重大じゃないわよ！それに、明かしたんじゃないかってあんたに発かれたの！」

つつこみがあると……楽だ……

笹波と道山がボケ倒すのを見て、俺は心の中で叫んではかりだったが、直接にそれを指摘してくれる奴がいると、本当に助かる。

非常識な奴らに、自分の常識をぶつけてくれる人間がいるから、感覚が麻痺しないですむ。

「さて、自己紹介も済んだところで、これからの事を話し合おう」

「私は自己紹介してないからね！仲間じゃないからね！」

沙之が言うのが聞こえていないかのようにして、そのまま道山が話し始めた。

魔王は天空に城をかまえて、そこを根城にするらしい。

「窓から外を見てください」

笹波が言うので、俺は部屋の窓から外をしてみる。

「……なんだあれ……」

魔王を封印していた、黒い棺のような色をした金属で作られた城で、遠目に見ても、大きさは金持ちの豪邸など比ではないくらいのもので、遠くからでも分かる。

「文献の通りです。魔王は城を作り、『けがれ』を空から地上にはなつて、地上を混乱におとしいれます」

それで、俺はこの二人にどうするべきかを聞いた。

「すぐに行くぞ」

俺と沙之の家の前には子供用の広場があった。

「ついてきちゃったけど、ここからはあんただけでがんばるのよね」

まあ、ついてきたところで何もできないわけだ。当然だろう。

「君の力も頼りにしている」

「そうですよ。旅は道連れっていうじゃないですか」

「それって、そっちの方から言う事じゃ、ないんじゃない……？」

20

「俺たちは秘密を明かし合った仲間たちだ。どんな事があるって一緒にになって戦おう。死ぬときだって一緒だ」

状況が合っていれば泣ける言葉にも聞こえただろう。だが、今の道山は沙之を巻き込むために、真面目な顔でとぼけた事を言っているのだ。

よくもまあ、道山はあんな事を言っておいて顔がニヤつかないものだと、俺は心底から感心する。

そこに沙之が勢いよく口を挟んだ。

「ちよつと待った！ あんた達とは違って、私は一般人よ！ そんな無茶についていけるわけが無いじゃない！」

だが、俺はそれを無視した。他の二人も同じ態度だ。

お互いに秘密を明かし合った仲であるのは変わりが無い。自分たちだけで危険に立ち向かうというのもバカらしい。どうせなら、こいつも巻き込んでしまおうというのが、俺の考えだった。おそらく他の二人も同じ考えだろう。

「さあ、沙之さん。つかまって」

笹波は言うが、沙之が笹波につかまるといふよりは、笹波が逃げようとしている沙之をつかんで逃がさないようにしている形だ。

「ちよつと！ 人の話を聞きなさいって！ こら！」

ジタバタともかく沙之に、その背後でニヤリと黒い笑みを浮かべている笹波。その笑顔は、見ようによつては楽しそうにも見える。そして、沙之を掴んだまま、笹波は空に飛んでいった。

「こら！ 飛ぶなあ！ ついていけないって言っているでしょう！」

俺はあの城まで走っていった。

天空に浮かんでいるのであるが、あの城の高さなら俺のジャンプでも十分届く。副会長も、何か城に乗り込む方法があるのだろう。俺の後ろを走っていく。

ここに来てはまだ観念をする様子を見せない沙之が、笹波の腕の中で騒いでいる姿が、上空に見える。

「キヤー！ 降ろして！ 降ろして！」

「降ろして欲しいの？ それじゃあ」

笹波はそう言い、沙之を掴んでいる手を放した。そして、沙之はそこから落下していく。

「いやあああああ！」

だが笹波は沙之を追いかけて、地面に叩きつけられる前に沙之を助け出した。

恐怖から、肩で息をして震えている沙之を抱えながら、俺のスコップは満足そうにしている笹波の顔がとらえていた。

「どサドだ……」

俺は言う。笹波はこちらを向いて小さくニコリと笑いかけてきた。彼女は聴力が強化されているのだろうか？ 今の言葉は、どうやら聞かれてしまったようである。

笹波は、それから意識を沙之に移していった。

「もう一度降ろしてあげましょうか？ 『降ろして』って言うてみますか？」

沙之は笹波の声を聞き、首を思いつき横に振った。

魔王城の入り口にいくと、重厚な黒鉄の扉が全員を出迎えた。

高さが自分達の十倍以上ある扉を開けるのは並大抵の事ではないだろう。

「まったく……デカけりやいいってもんじゃないだろう。こんな扉から、どうやって出入りしているんだよ？ 魔王つてのは」

俺は扉をぶん殴る。そうすると扉に人が一人通れるくらいの穴が開いた。

中はまったく照明がついておらず、黒い壁があり、彫刻がいくつも並べられている、それが不気味な雰囲気を出しているのが見えた。「中には何もいないな、デカイだけの城で一人暮らしなんてさびしい人生を送っている」

俺はそう軽口を叩く。

「これから『けがれ』を使って作った手下を増やすつもりなんだろう

う」

道山が言う。俺が作った穴を通り、城の中に入っていた。続いて俺が通り、笹波が通っていく。

「それじゃあ、私はここで待って……」

沙之が全員が通った後でそう言いかけると、札をつなげて作られた縄のようなものが沙之をがんにがらめにして城の中へと引き込んだ。

四部

道山の先導で、城の中を歩く俺達。

「もう諦めろ」

げんなりした顔をして俺達の後からついてくる沙之に向けて、俺はそう言う。

「仲間はいつも一緒にいるものだ。たとえ死ぬときであつてもな」

「まだ言うか……」

無理に沙之をまきこんでいるだけなのに、道山はいけしゃあしやあと仲間だのと言い出す。

「私達には沙之さんが必要なの。居てくれるだけでも心強いわ」

「お前もかよ」

笹波もまた、そう言いだす。まあ、俺だって沙之を巻き込もうとしたのには変わりはない。特に何かを言える筋合いではないのである。

「あんたからは何か無いの？」

沙之は、俺に向けて言い出した。

この状況で何を言い出せというのだろうか……二人に合わせてバカな事を言えというのだろうか？ それとも、謝罪の言葉でも言えというのだろうか？

それでも考えた俺は、とりあえず、沙之に向けて言う。

「ついてきてくれてありがとう」

まあ、こんなところだろう。謝罪をする気は無いし、憎まれ口を言える立場でもない。

「そんな……どういたしまして」

なぜか、小さな声で言った沙之。どうしてだろうか？ また気まぐずなる。

最近の沙之はなぜか、しおらしい。

わかりやすいぐらいにゴテゴテとした彫刻をされており、豪華につくられた扉があった。

この先にこの城の主がいるというのを書いてあるような様子だ。それを開けると広い部屋に出た。

遠くには、カーテンがある。カーテンの先にはどでかい椅子があるようだ。月の光に照らされてシルエットが映っていた。

「また、私を封印しに来たのかな？」

カーテン越しに見える高い玉座。玉座に隠れてシルエットすら見えない魔王の声である。

男の低い声ではなく、甲高い子供のような女の声であった。

「最近のトレンドなのか？　魔王は実は女だとかいうのは」

「今は女が強い時代なのでね」

俺の憎まれ口をサラリとかわした魔王。力のほうがどうかは知らないが、口の方は達者のようである。

「帰るならばいまのうちだぞ。見逃してやるからシッポを巻くとい、扉は開けたままにしておいてくれ」

「扉は閉まったままだ。穴は開いているけどな」

「なっ……いくら重くて開けられないからって穴まで開けて入ることはないだろう！」

「やっぱ、あの扉お前も開けられなかったのかよ……」

「うるさい！　昔は開けたんだ！　今は力を失っているが、また力を蓄えれば開けれるように……」

「力を蓄える前の、今がお前を倒すチャンスだつて事だな」

「……ふん。私の力がまだ弱いからといって、お前達が私に勝てるというわけではないぞ」

シルエットが動いた。小さな影が動き、こちらに向かってくる。

俺は腰の剣を抜き、カーテンを切り捨てた。カーテンははらりと落ち、魔王の姿が明るみになってくる。

「私の姿を見て恐怖するがいい」

ものすごいドヤ顔をしている魔王であるが、俺達は欠片も恐怖な

どしていない。

姿は完全に、十歳にも満たないだろうと思われるただの幼い女の子の姿だ。赤いドレスを着ているが、それは背伸びをしているだけにしか見えない。

俺達は、呆然としているのであるが魔王は、『くつくつく……』と笑いながら、いまだにウザイドヤ顔をしている。

俺は、腰の剣を抜いて魔王に切りかかった。

俺の剣は、狙いはまったくブレもせず、見事に魔王の脳天に叩きつけられた。思っていた以上に簡単に事が終わったので、さすがに俺も肩透かしを食らった気分だ。

この魔王……すごく弱い。

一撃で叩きふしたのだが、どうも悪いことをしてしまったような気になってきた。

「岩城君……女の子にそんな事をするなんて……」

笹波が言い出した。

「ちよつと待て……俺が悪者みたいな言い方はやめろ」

笹波だつてこの魔王を倒すためにここにやってきたはずだ。それなのに、魔王の味方にでもなったのだろうか？

「あんた……やめてあげなさいよ」

頭をおさえてうずくまっている魔王を見て、沙之まで言い出した。

「俺達は何のためにここに来たのか分かってるか？」

この、魔王を倒すためにやってきたのだ。相手の見た目はともかく、俺のやっている事は何も間違つてはいないはずだ。

だが、道山は言い出す。

「この魔王たんを保護するためだ」

真面目な顔をしながら言う道山。俺はおぞ気に襲われた。

「魔王『たん』って何だよ！」

俺が言うが、道山はそれを無視して魔王のところへ歩いていった。「さあこんな広い城に一人で暮らしていてもさびしいだけだろう。うちに来るといい」

道山が魔王に向けて言い出した。

「これは誘拐の犯行中？」

俺は、笹波と沙之に向けて聞いたが、二人もこの状況にはついていけないようだ。

『なにすんだ！ 離せよ！』

『あつたかい布団とご飯を用意するよ。来るんだ』

そう言いあいながらもみ合う魔王と道山。俺は笹波を見た。これを止めるとしたら笹波であろう。魔王というものをどう処理すればいいか分かるのは、道山を除けば笹波一人だ。

「道山君一人でも魔王退治は大丈夫そうですね」

笹波は言う。これが退治になるのだろうか？ これはどう見ても

……

「どうでもよくなっているだろう！ 笹波！ 道山を見る目が冷たいんだよ！ ゴミを見る目つきなんだよ！」

この事態を放棄している笹波。沙之もそれに合わせて言い出す。

「それでいいなら帰りましょう」

「お前はなんとか言え！ これでいいのか！」

これに乗じて、道山がウザイドヤ顔で言い出した。

「この魔王の事は僕に一任してもらおう。責任を持って一人前のレディーに更生をさせるから」

「お前にだけは任せちゃいけないんじゃないか！」

俺は一人で反対するも、全員の多数決で魔王は道山が連れ帰る事が決まり、この件は決着をした。

道山が魔王の手を引いて帰る姿が、街灯に照らされている。

「というか、道山が魔王を誘拐している姿だな」

なんとかして道山の手から離れようしているが、道山の力の方が強く、無理矢理引っ張られているという様子だ。

ここは両方が堀に囲まれた住宅町の生活道路。

笹波と沙之の二人は、揃って何も言わずに、女が汚いものでも見

る時の目をしている。

『なんか、この光景怖いな……』

背筋に冷たいものが走る感覚を感じる。

だが、そんなものはどうでもいい。俺はヘルメットをかぶりながら、偉いさんに向けて言う。

「原因は排除されたんだから、もう俺は御役御免だな」

『けがれ』の元凶に一応の対処がされたのだから、もう孤独なヒーローなどを続ける理由はなくなった。

あとは、このスーツを返せば完全に研究所との縁も切れることだろう。

『元凶が消えてもまだ、凶暴化が完全になくなるわけではない。もう少しだけ付き合ってくれ』

偉いさんは言う。まだ後始末が残っているのだ。

『それに、もう君は孤独な戦士ではないぞ。新たな仲間が見つかった』

それなら、そいつに全部仕事をやらせて俺を解放してくれ……そう思ったが、そいつの顔を見てからでもそう言うのは遅くない。

「どんな奴なんだ？」

そいつがもし使い物にならない奴だったら、どうせまたおはちが回ってくるのは俺のところだろう。

ある程度、しっかりした奴であってほしい。

『君のすぐそばにいる。沙之君だ』

「……はあ……？」

俺は沙之の事を見た。笹波とそろって、いまだにあの顔をしながら道山の事を見送っている。

「おい、道山はもう見えなくなっているだろう。いいかげん、それをやめろ」

俺が言うのを聞いて我に返った沙之に偉いさんの言った事が本当であるか聞こうとした。

『沙之君。君にお願いがあるのだが』

俺が言う前に偉いさんがスピーカー越しに言い出した。

『君には岩城君と一緒に戦ってもらいたい』

俺の手元になにか妙な飾りの付いたビンが現れた。明らかに香水のビンといった感じのものだ。

『それで君は天才魔法少女のフラインティになれる』

お年を召された貫禄のある声で、よくも恥ずかしげも無く魔法少女などといえたものである……

それを受け取った差雪は、きりふきを使って自分に香水を振り掛けた。

頭に派手なりボンが巻かれ、首元には花の飾りの付いたチョーカ。そういった感じで、ほんとと全身に戦闘スーツが装着されていた。

変身してみると、沙之の姿はドレスのような服装になる。とてもではないが、戦いに向くようには見えない。

「すっごーい。これってプリシユアでしょ？」

女兒に大人気の魔法少女物のアニメの名前であるのは自分も知っている。沙之にこれで戦わせるつもりなのだろうか？ げんなりした気分の俺は、文句を言いたいながらも口を動かさなかった。

「岩城君の方もパワーアップしているぞ」

偉いさんが言う。

嫌な予感がする……

「早く！ あんたも変身してみなさいよ」

沙之に急かされて俺も変身してみる。

いつもの戦闘スーツではないのが感覚で分かる。体全体を覆うスーツの代わりに着心地の悪い、高級感の漂う衣服を纏うことになった。

「タキシードって……素敵」

「ちよつと待てえええええ！」

昔流行ったアニメだ。ヒロインがピンチの時に、ちよつとよく登場し何食わぬ顔で手助けをする仮面の男そっくりの姿になったのだ。

「こんなカツコで戦えつてのか！ 剣が！ 何でバラ？」

いつもは剣が刺さっている腰元には一輪のバラが刺さっている。こんなもので戦えというのだろうか？ 正気の沙汰ではない。

『ただのバラではない。それを高くかかげてみるんだ』

言われたとおりにバラを高くかかげると、それが変形をした。蔓が伸びていき、やがて茨の鞭に形を変えていった。

「違うキャラが混ざってる！」

これは、完全に狂気の沙汰の繰り返しである。、沙之は俺の姿を見てぼうつ……としていた。

「素敵……」

本当に素敵なものに見えるのであれば、沙之の目は完全に腐っている。

『さっそく反応だ。現地に向かってくれ。頼むぞセーラーキュア』

「さりげなく『セーラーキュア』とか言うんじゃない！ どこにセーラーの要素があるよ！」

『岩城君のスーツは、変身第二段階になるとセーラー服になるのだ』
「その設定のどこに『キュア』（癒す）の要素があるんだよ！ 笹波に見られたらまたゴミを見る目つきで見られるじゃないか！ 俺が精神的にボロボロになるだけじゃないか！」

だが、この偉いさんは都合の悪いことになると答えない。それは経験で知っていることだ。

齒軋りをしながら、帰ってこないと分かりつつも返事を待っている俺の手を、沙之の手がつかんだ。

「すぐ近くよ。ぱぱとやっちゃいましょう！」

俺は、げんなりした気分になりながらも、沙之に連れられて次の戦いの舞台へと向かっていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8224r/>

世界は秘密にあふれてる

2011年3月24日23時10分発行